様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　5　月　2　日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２０６９２
研究課題名（和文）　開発と実践―筑波山山麓地域における地域づくり過程のアクター分析と政策的提言
研究課題名（英文）　Development and Practice　-Actor-oriented Analysis of the Process of Community Development in Mt.Tsukuba area and its Policy Option

研究代表者
前川　啓治（MAEGAWA KEIJI）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：８０２４１７５１

研究成果の概要（和文）：

筑波山麓全域を人類学的に調査し、とくに各地区独自の地域づくり活動の実態を調べ、活動のアクター間の関係性を明らかにした。また、つくば学園地区での独自の地域づくりやネットワーク形成の事例も取り上げ、そうした中から山麓地区と連携できる活動をとりあげ、その可能性を調べた。

具体的には、大学および大学院での「野外調査法」の実習を通じて、学生主体による山麓・学園地域の聞き取り調査を指導・実施し、報告書としてまとめた。この報告書はつくば市の観光基本計画策定の基礎資料としても利用されている。

研究成果の概要（英文）：

At first, I made an anthropological fieldwork on the large area surrounding Mt. Tsukuba in Tsukuba city, Ibaraki prefecture, paying particular attention to unique community-building activities of each sub-area or village, and also the relationship of active actors involved in these community activating activities.

At the same time, I picked up cases of network-building activities of urban central area so-called *Gakuen*.of Tsukuba city, and sought the possibility of these activities of both areas cooperating with each other.

As a concrete procedure of my research, I organize fieldwork activities both of graduate students and undergraduate students in the class of *field research method*, and actually conducted both in-depth and extended fieldwork mainly based on interview method during the terms of this research, and published its result as a series of fieldwork reports, which are, as basic materials, actually being used for designing Tsukuba City Master Plan for Tourism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：開発、地域づくり、アクター、エージェント、開発の人類学

１．研究開始当初の背景

人類学はフィールドワークという手法によって、対象社会の人々とともに生活をし、カルチュア・ショックを受けながらも、人々に受け入れられてゆく過程を通して、対象社会の文化を自らの文化との対比によって客体化し、提示してきた。

この経験的手法の優位性は明らかであるが、一方で、そうした調査に基づいた詳細な記述が対象社会の現状を明らかにしながらも、そうした社会の直面する問題への対応という視野を有していなかった。対象社会が調査の対象というだけではなく、よりよき変化をもたらされるべき政策的対象として捉えることが求められてきた。

研究代表者は、1980 年代にオーストラリア北東部に位置するトレス海峡島嶼社会の変容を研究対象とし、フィールドワークを行なった。その際のアプローチは開発現象を対象とする「開発の人類学」というものであった。そこから、開発現象を「人類学」するだけでなく、その延長としての開発への実践が研究代表者の研究課題ともなっていた。

人類学的には、伝統地域が、開発の人類学および開発人類学の手法による実践的なコミットメントの対象として浮かび上がってきたといえよう。国内における開発研究の一分野として、「地域づくり」が対象とされ、人類学的な応用・実践的アプローチが求められてきていた。

２．研究の目的

つくばエクスプレスが開通し、筑波山麓地域では、外部に起因する社会変動が生じつつある。そうした中、地域づくりを開発の一つの形態と捉え、人類学的調査を行ない、筑波山麓の地域づくりの実践に関わることが当研究の目的である。

山麓地域の各地区の特徴を明らかにし、その特徴に応じた地域おこしの形態を探る。各々地区の特徴を明らかにし、地区ごとの資源を、歴史資源、環境資源、文化資源、自然資源として、発掘し、網羅し、分類してゆく。また、内外のミドルマンやNGOやNPO活動の実態を調査し、地域おこしの過程におけるアクターの意義と重要性を明らかにしてゆく。

その上で、各々の地域の特徴を補い合う独自の歴史空間という捉え方を確立し、地域住民の空間アイデンティティの拡大・展開を促し、連帯することを促す。

３．研究の方法

開発論および地域おこしの文献、筑波山麓地域の自然、歴史、文化、行政プロジェクトに関する資料のデータベースを作成している。

筑波山麓地域という空間をノーマン・ロングのいうソーシャル・フィールド（社会的な場）と捉えた場合、小田、北條、筑波、臼井、神郡、平沢など各地区は、その下位空間を構成するドメイン（空間領域）とされるが、実際にはソーシャル・フィールドとドメインは単純な階層構造ではないため、行政が設定する筑波山麓地域（旧筑波村）と各地区との関係性を見極め、地域づくりのアクターを特定し、アクター間の交渉過程に留意してきた。

具体的には、大学および大学院での「野外調査法」の実習を通じて、筑波山麓地域におけるさまざまなインフォーマントへの聞き取り調査を指導・実施し、聞き取り調査の報告を整理した。

まず、生態や伝承、生業、社会構造や世界観、個人の生活史、行政の関わり方などの全般的な調査からはじめ、生成しつつある地域おこしの運動に対する意識調査を実施した。

とくに筑波山麓地域のなかでも、小田、北條、筑波、平沢、筑波地区を集中調査し、その地区の視点から捉えた筑波山麓地域像を明らかにした。

調査の後半からは、地域おこしのリーダーなどのキー・パーソンにインタビューを試み、アクターとしての総合的把握を行ない、さらにアクター間の関係性を

明らかにし、そこから、より広範におよぶ地域統合という観点から、更なる地域づくりの可能性を探るという実践的アプローチを行なった。

４．研究成果

開発の人類学は、外部からの影響による伝統社会の変容をよく捉えている。人類学的な手法によって、開発の民族誌を生産しながら、同時に自らも開発の一アクターとなって、対象社会の人々の視点を重視した開発を推進するという自己言及的な開発への関わり方が新たなアプローチとして求められている。このことは開発の人類学と開発人類学の統合という斬新な試みである。

ＰＲＡ（Participatory Rural Appraisal）やＰＬＡ（Participatory Learning and Action)といった参加型プロジェクトは一定の成果を上げてきたが、こうした手法における「参加」の在り方に大きな問いが投げかけられてきている。この研究はそうした問いに対し、現在注目を集めつつある「プロセスとしての開発」という方法や視点につながるアプローチの一つの在り方を提示しているといえよう。

人類学のフィールドワークの手法を放棄して既存のプロジェクト型開発の手法に従属することなく、既存のフィールドワークの応用展開として、開発の人類学を「プロセスとしての開発」アプローチに発展させてゆく新たな方向性を喚起する研究である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計６件）

1. 前川啓治「グローカリゼーションをマクドナルドから見る」『シンポジウム　浮上する21世紀のアジアⅡ－人・モノ・カネのスパイラル－』　筑波大学グローバルOB･OGネットワーク　日本・韓国社会文化フォーラム、筑波大学、2009年12月21日
2. 前川啓治「空き地で交流・空き家に定住－茨城県北･常陸太田･筑波山麓北条の場合」『空き地で交流・空き家に定住』淡路島スローライフ･フォーラム〈南あわじ分科会〉、サンライズ淡路、2009年12月4日
3. 前川啓治「マクドナルドから見えるもの」『2009年度第2回さんか・さろん』スローライフ学会、スローライフ・ジャパン、東京、2009年8月18日
4. 前川啓治　「グローバルとローカルの二元論を超えて」『シンポジウム　グローカル研究の可能性－社会的･文化的な対称性の回復に向けて－』成城大学民俗学研究所グローカル研究センター、2009年3月9日
5. 前川啓治　「グローバリゼーションからグローカリゼーション、そしてオルター・グローバリゼーションへ」『早稲田文化人類学会第十三回研究集会』招待講演　早稲田大学、2010年7月10日
6. 前川啓治　コメンテーター、『シンポジウム 共振する世界の対象化に向けて－グローカル研究の理論と実践－』成城大学民俗学研究所　グローカル研究センター、2010年5月15日

〔図書〕（計５件）

1. 前川啓治編　『平成22年度　野外調査研究報告書　つくばから筑波へ』筑波大学人文社会科学研究科/社会･国際学群国際総合学類、2011年、172頁。
2. 前川啓治編　『平成20･21年度　野外調査研究報告書　筑波山麓地域Ⅲ』筑波大学人文社会科学研究科/社会･国際学群国際総合学類、2009年、151頁。
3. 前川啓治「グローバルとローカルの二元論を超えて」上杉富之･及川祥平編　『グローカル研究の可能性－社会的・文化的な対称性の回復に向けて－』　成城大学民俗学研究所　グローカル研究センター、2009年、（共著）50-64頁。
4. 前川啓治「開く・援ける」『文化人類学辞典』日本文化人類学会編 丸善株式会社、2009年、（共著）612－617頁。
5. 前川啓治編　『平成19年度　野外調査研究報告書　筑波山麓地域Ⅱ』筑波大学人文社会科学研究科/社会･国際学群国際総合学類、2008年、95頁。

〔その他〕

ホームページ等
「筑波山ルネサンス」
http://renaissance.hass.tsukuba.ac.jp/

６．研究組織

(1) 研究代表者

前川　啓治　　(MAEGAWA KEIJI)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：80241751